

## [教育実践研究報告]

### 手術室実習を通しての学生の学び 第2報

- 学生が捉えた手術室で行われていた看護 -

北 村 直 子	奥 村 美奈子	兼 松 恵 子	田 中 克 子
小 田 和 美	梅 津 美 香	古 川 直 美	原 敦 子
林 幸 子	小 野 幸 子	坂 田 直 美	齋 藤 和 子

### What Students have learned through Operation Room Nursing Practice ? Part Ⅱ : Operating Room Nursing that Students have gained

Naoko Kitamura, Minako Okumura, Keiko Kanematsu, Katsuko Tanaka,  
Kazumi Oda, Mika Umezu, Naomi Furukawa, Atsuko Hara,  
Sachiko Hayashi, Sachiko Ono, Naomi Sakata, and Kazuko Saito

#### はじめに

成熟期看護学領域別実習は「さまざまな健康状態で生活を営んでいる成熟期の人々への看護実践を通じて、成熟期看護学のあり方について理解を深める」ことを実習目的としており、さらに具体的目標では、健康課題をもつ成熟期の人に着目して看護を実践することを求めている。したがって、成熟期看護学領域別実習のもとに展開される手術室看護学実習においても、特殊な治療環境下におかれる成熟期の人に着目した看護について理解を深めることが求められる。看護の対象となる人に着目するのであれば、本来、学生は患者の術前、術中、術後の看護を継続して受け持つ形での実習がもっとも望ましいが、本学においては、実習時間の限界から、このような形で実習を行える学生は限られており、学生の学びを明らかにしてその特徴を捉えた実習方法や指導方法を検討する必要がある。

また、来年度より一般病院での実習期間が11日間とさらに短くなり、そのうちの1日を当てる手術室看護学実習の意義を十分に検討する必要があると思われる。

なお、昨年、同実習を行った学生の記録から看護に限定しない幅広い学びを報告している<sup>1)</sup>が、今回は成熟期看護学領域別実習における手術室看護学実習の意義をさらに考察するためにも、昨年度とは別の記録部分である、

「手術室で行われていた看護とその目的・意図」を分析対象として学生の学びを明らかにし、さらに、異なる方法で実習を行った学生の学びの違いを明らかにするために、受け持ち患者の設定方法別に学生の学びを分析し、第2報として報告する。

#### 手術室看護学実習の概要

##### 1. 実習方法

一般病院での12日間の実習のうち1日を手術室看護学実習とする。学生は臨床指導者の説明を受けながら患者の手術室への入室から退室までを見学する。受け持ち手術患者の術前・術後訪問が行なわれる場合は可能な限りそれらの場面も見学する。

##### 2. 実習の場と臨床指導者

本学の一般病院での実習は5つの総合病院の5病棟で行っており、うち3つは外科系病棟、2つは内科系病棟となっている。手術室看護学実習はこれら5総合病院の手術室で行い、手術室内での実習指導は手術室看護師が行っている。

##### 3. 受け持ち患者の設定

学生は以下の3つの方法いずれかで患者を受け持つ。一般病院での実習を外科系病棟で行い手術室実習でも受け持ちを継続する方法、外科系病棟で実習を行い手術室

実習時のみ別の受け持ち患者を設定する方法, 内科系病棟で実習を行い, 手術室実習時のみ外科系病棟の患者を受け持ちとして設定する方法である。また, 手術室実習での受け持ち患者は原則として全身麻酔下手術を受ける患者とする。

#### 4. 実習記録用紙

質問項目は 患者の情報 (年齢・性別・診断名・術式・麻酔方法・手術時間), 実施されていた看護とその目的・意図, この実習を通して学んだこと・感じたこと, であり, A4版1枚の用紙となっている。記録用紙の提出は, 原則として手術室実習の翌日である。

### ・ 研究目的

手術室看護学実習を行った学生の学びの内容をあきらかにし, さらに3つの異なる方法で受け持ち患者を設定して実習を行った学生の学びの内容を比較することで, 成熟期看護学領域別実習における手術室看護学実習の意義を考察し, 今後の課題を見出すことである。

### ・ 研究方法

#### 1. 研究対象

本研究の対象は, 成熟期看護学領域別実習の手術室看護学実習を終了した学生77名のうち, 研究での記録用紙の使用に了解が得られた73名の学生である。

#### 2. 倫理的配慮

成熟期看護学領域別実習がすべて終了したのち, 学生全員に実習記録の使用目的, 使用方法, 個人が特定されないまとめ方をすること, 承諾の有無が成績に関与しないことなどを口頭と書面で説明した。その後, 記録用紙使用の承諾可否を明記した承諾書の提出を求め, 承諾が得られた学生の記録のみを分析対象とした。

#### 3. 分析方法

##### 1) 対象

研究対象である学生73名の「手術室看護実習記録用紙」の質問項目 実施されていた看護とその目的・意図の記述内容とする。

##### 2) 方法

##### (1) 全体分析

73名の全対象学生の「実施されていた看護とその目的・意図」の記述内容を読み, 行為をその目的・意図とともに

に抜き出し, 簡潔な文章としたものを「看護行為とその目的・意図の記述」とした。その際, 行為及び目的・意図が看護の視点から適切でないと思われるものは削除した。次に, 行為と目的・意図ともに類似する記述を集め, その行為と目的・意図をあらわす名称をつけ, 「看護行為とその目的・意図」とする。さらに, 目的・意図の意味内容が類似するものを集める作業を繰り返し, 最終的に集められたものにその意味内容を表す名称をつけ, 「目的・意図からみた学生が捉えた看護」のカテゴリーとした。

分析作業は成熟期看護学講座の教員3名で行い, 全員の合意が得られるまで検討を重ねた。

##### (2) 受け持ち患者の設定方法別の分析

全対象者73名を受け持ち患者の設定方法により3群に分けた。一般病棟での実習を外科系病棟で行い手術室実習でも受け持ちを継続した28名を外科系継続群, 外科系病棟で実習を行い手術室実習では別の受け持ち患者を設定した20名を外科系単発群, 内科系病棟で実習を行った25名を内科系単発群とした。各群の学生の「看護行為とその目的・意図の記述」から再度カテゴリーを構成し, カテゴリーを構成する記述数及び学生数を各群毎に明らかにした。

### ・ 結果

73名の対象者の実習記録から抽出した「看護行為とその目的・意図の記述」は627, 集約された「看護行為とその目的・意図」は118, 最終的な「目的・意図からみた学生が捉えた看護」のカテゴリーは12であった (表1)。なお, 記録から「看護行為とその目的・意図の記述」を抽出する際に, 行為及び目的・意図が看護の視点から適切でないために除かれた記述が129個あり, それらの記述のほとんどは, 「手術をスムーズに行うため」など具体的看護行為の目的・意図が曖昧なものであった。

はじめに全体分析の結果を述べ, 後に受け持ち患者の設定方法別の分析の結果を述べる。

#### 1. 手術室看護学実習を行った学生が捉えた看護

##### 1) 【不安軽減の看護】

58名の学生の141記述から構成され, 「看護行為とその目的・意図」は《不安軽減のため環境を整える》, 《局所麻酔下の不安軽減のため話をする》, 《硬膜外チューブ挿

表1 目的・意図からみた学生が捉えた看護

目的・意図からみた 学生が捉えた看護	学生数/ 記述数	看護行為とその目的・意図	
		個数	内容 目的・意図が重複する際は省略し、看護行為を「」で表記した
不安軽減の看護	58/ 141	17	不安軽減のため「環境を整える」・「患者と関わる」・「術前術後訪問する」・「情報収集する」 局所麻酔下の不安軽減のため話をする 硬膜外チューブ挿入時の不安軽減のため「患者のそばに立つ」・「声をかける」・「処置を説明する」 入室時の不安軽減のため声をかける 麻酔覚醒時の不安軽減のため「声をかけて手を握る」・「声をかける」・「音楽を流す」・「声をかけて訴えをよく聞く」 麻酔導入時の不安軽減のため「タッチングをする」・「声をかける」・「声をかけてつきそう」 孤独感を与えないため声をかける
患者を把握する看護	57/ 135	12	患者の状態を把握するために「観察する」・「反応を確認する」・「記録する」・「測定する」 患者を知るために術前訪問する・申し送りを受ける 術後の状態を知るために術後訪問する 異常の早期発見のために「観察を行なう」・「状態を医師に報告する」・「モニタリング機器を準備・管理する」 ケア計画のため「情報収集を行なう」・「状態を観察する」 手術スタッフ全員が患者を把握するため情報伝達する
合併症を予防する看護	56/ 135	26	合併症予防のために「体位を整える」・「低体温を防止する」 皮膚障害予防のため「イソジンをつき取る」・「テープ固定部にガーゼを当てる」 角膜損傷予防のため軟膏塗布する 血栓予防のため足にエアークッションを用いる 褥創予防のため除圧する 神経麻痺予防のため「観察する」・「クッションを入れて関節の過進展を防ぐ」 人工心臓による合併症予防のため状態を査定する 低体温予防のため「室温調整をする」・「処置を素早く行う」・「体温を測定・管理する」・「体内に入れるものを温めておく」・「保温具で体を温める」・「肌の露出をさける」 腰痛予防のためクッションを入れる 感染防止のため「器材の受け渡し・管理を行う」・「ガウンや手袋の装着を介助する」・「清潔操作を行う」・「手洗いをする」・「手順を遵守して消毒する」・「滅菌済みガウン・手袋を装着する」 感染の機会を増やさないため無駄な言動をしない 清潔区域を保持するために器材の準備・物品の補充・環境調整を行う 術後の清潔を保持するため「体を拭く」・「ガーゼをテープで貼る」
安全を確保する看護	54/ 109	28	安全に手術を行うため「スムーズに器材の受け渡しをする」・「状態を観察する」・「器材・環境を管理する」・「情報をチームメンバーに伝える」 事故防止のため声を出して確認する 患者を確認するために医師に患者情報を伝える 患者の取り違い防止のため「直接氏名を確認する」・「病棟から患者情報を引き継ぐ」・「術前訪問する」 体内への置き忘れ防止のため「器材やガーゼの数を確認する」・「閉創までは普通のガーゼは準備しない」 体位変換を安全に行うために多人数で実施する チューブ類の事故防止のため確認・管理する 感電防止のため「対極板を貼る」・「余分なイソジンを除去する」 転落防止のため「ふらつきを確認する」・「患者に声をかける」・「患者の体を押さえる」・「体位を固定する」・「柵をする」・「そばで注意を払う」・「手を握る」 薬剤ミスを防止するために薬剤を確認する 輸血間違い防止のため患者・血液型・輸血番号を確認する 心電図計測が適切に行われるため電極を適切に貼る 膀胱留置カテーテルを適切に挿入するためバルーンの確認を行う 無呼吸状態を短くするために挿管時に医師の介助をする 手術操作を適切に行うため時間の管理を行う 医療者の感染防止のため感染症情報・物品の数を確認する
術後にケアを継続させる看護	36/ 41	5	ケアの継続のため「申し送る」・「記録する」 術後のケアのため「申し送る」・「記録する」・「患者の状態を把握する」
緊急事態を予測して対処する看護	13/ 15	5	急変を予測して「全身管理・記録を行なう」・「患者の近くににいる」・「患者・物品・環境の準備をする」 緊急時に対応できるようトレーニングを行なう 異常発生時に適切な対応ができるよう異常の原因を考える
安楽を確保する看護	11/ 12	9	安楽のため「痛みの程度の予測を伝える」・「処置時に声をかける」・「意向を聞いて体位変換する」・「保温する」・「麻酔後に処置を行う」・「物品を用意する」・「苦痛を尋ねて対応する」 負担を軽減するため麻酔後に処置をする 不快感を与えないため私語をしない
状態を最良にする看護	9/ 12	6	安定した状態が維持されるように「点滴を適宜交換注入する」・「観察・記録する」・「体温調整する」 麻酔覚醒を促すため深呼吸を促す 薬効を維持するため指示を受けと薬する 状態に応じた指示を受けるために医師に報告する
医師を介助する看護	8/ 14	4	術者の介助のため「器材を受け渡す」・「物品準備・環境調整する」 医師の介助のため医師の役割を代行する 患者の変化を医師に報告するため観察をする
プライバシーを配慮する看護	6/ 6	2	プライバシーに配慮して必要以上の体の露出を避ける 羞恥心に配慮するため麻酔後に処置を行う
実施したケアを評価する看護	4 / 5	2	実施したケアを評価するため「術後訪問する」・「術後に観察する」
意志・意向を尊重する看護	2 / 2	2	患者の意向に沿うために「患者に確認して温度調節を行う」・「医師に患者の気持ちを伝える」
総計	- / 627	118	

入時の不安軽減のためそばに立つ》,《入室時の不安軽減のため声をかける》,《麻酔覚醒時の不安軽減のため声をかけて手を握る》,《麻酔導入時の不安軽減のためタッチングをする》など17であった。

## 2)【患者を把握する看護】

57名の学生の135記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《患者の状態を把握するために観察する》,《異常の早期発見のためモニタリング機器を準備・管理する》,《ケア計画のため情報収集を行う》など12であった。

## 3)【合併症を予防する看護】

56名の学生の135記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《合併症予防のため体位を整える》,《皮膚障害予防のためイソジンをふき取る》,《角膜損傷予防のため軟膏塗布する》,《血栓予防のため足にエアークッションを用いる》,《褥創予防のため除圧する》,《神経麻痺予防のため観察する》,《人工心肺による合併症予防のため状態を査定する》,《低体温予防のため室温調整する》,《腰痛予防のためクッションを入れる》,《感染防止のため器材の受け渡し・管理を行う》,《術後の清潔を保持するため体を拭く》など26であった。

## 4)【安全を確保する看護】

54名の学生の109記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《安全に手術を行うためスムーズに器材の受け渡しをする》,《患者の取り違い防止のため直接氏名を確認する》,《体内への置き忘れ防止のため器材やガーゼの数を確認する》,《体位変換を安全に行うため多人数で実施する》,《チューブ類の事故防止のため確認・管理する》,《感電防止のため対極版を貼る》,《転落防止のためふらつきを確認する》,《薬剤ミスを防止するため薬剤を確認する》,《輸血間違い防止のため患者・血液型・輸血番号を確認する》,《医療者の感染防止のため感染症情報・物品の数を確認する》など28であった。

## 5)【術後にケアを継続させる看護】

36名の学生の41記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《ケアの継続のため申し送る》,《術後のケアのため記録する》など5であった。

## 6)【緊急事態を予測して対処する看護】

13名の学生の15記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《急変を予測して全身管理・記録を行

う》,《緊急時に対応できるようトレーニングを行う》など5であった。

## 7)【安楽を確保する看護】

11名の学生の12記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《安楽のため痛みの程度の予測を伝える》,《負担軽減のため麻酔後に処置をする》,《不快感を与えないため私語を話さない》など9であった。

## 8)【状態を最良にする看護】

9名の学生の12記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《安定した状態が維持されるように点滴を適宜交換注入する》,《麻酔覚醒を促すために深呼吸を促す》など6であった。

## 9)【医師を介助する看護】

8名の学生の14記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《術者の介助のため器材を受け渡す》,《患者の変化を医師に報告するため観察する》など4であった。

## 10)【プライバシーを配慮する看護】

6名の学生の6記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《プライバシーに配慮して必要以上の露出をさける》など2であった。

## 11)【実施したケアを評価する看護】

4名の学生の5記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《実施したケアを評価するため術後訪問する》など2であった。

## 12)【意志・意向を尊重する看護】

2名の学生の2記述から構成され,「看護行為とその目的・意図」は《患者の意向に添うため患者に確認して温度調節する》,《患者の意向に添うため医師に患者の気持ちを伝える》の2であった。

## 2. 受け持ち患者の設定方法別にみた「目的・意図からみた学生が捉えた看護」

実習形態の違いによる3群それぞれの記述数は外科系継続群(28名)232,外科系単発群(20名)150,内科系単発群(25名)245であり,各群の記述から再度構成された「目的・意図からみた学生が捉えた看護」のカテゴリーはそれぞれ,11,10,11であった。各群のカテゴリーを構成する記述数・学生数は表2に示す。3群とも過半数以上の学生の記述により構成されたカテゴリーは【不安軽減の看護】、【患者を把握する看護】、【合併症を予防

表2 受け持ち患者の設定方法別にみた「目的・意図からみた学生が捉えた看護」の記述数・学生数

目的・意図からみた 学生が捉えた看護	外科系継続群 (n = 28)		外科系単発群 (n = 20)		内科系単発群 (n = 25)	
	記述数	学生数 (%)	記述数	学生数 (%)	記述数	学生数 (%)
不安軽減の看護	50	22(78.6)	33	16(80.0)	58	20(80.0)
患者を把握する看護	51	22(78.6)	38	16(80.0)	46	19(76.0)
合併症を予防する看護	46	23(82.1)	25	11(55.0)	64	22(88.0)
安全を確保する看護	39	19(67.8)	29	16(80.0)	41	19(76.0)
術後にケアを継続させる看護	18	16(57.1)	8	8(40.0)	15	12(48.0)
緊急事態を予測して対処する看護	3	3(10.7)	4	3(15.0)	8	7(28.0)
安楽を確保する看護	4	4(14.3)	4	3(15.0)	4	4(16.0)
状態を最良にする看護	5	4(14.3)	6	4(20.0)	1	1( 4.0)
医師を介助する看護	12	6(21.4)	2	2(10.0)	0	0( 0)
プライバシーを配慮する看護	3	3(10.7)	1	1( 5.0)	2	2( 8.0)
実施したケアを評価する看護	0	0( 0)	0	0( 0)	5	4(16.0)
意志・意向を尊重する看護	1	1( 3.6)	0	0( 0)	1	1( 4.0)

する看護】、【安全を確保する看護】の4つであった。

【安楽を確保する看護】、【状態を最良にする看護】、【プライバシーを配慮する看護】は各群ともに2割以下の学生の記述から構成された。【医師を介助する看護】、【実施したケアを評価する看護】、【意志・意向を尊重する看護】は記述がなく、カテゴリーが構成されない群があった。

## 考察

### 1. 目的・意図からみた学生が捉えた看護

学生らが捉えた目的・意図からみた看護は、不安軽減や患者の把握、合併症防止、安全確保など手術患者を不利益から守り、よりよい状態にする目的をもった「患者を中心とした看護」であった。佐藤ら<sup>2)</sup>は、手術室看護師が考える手術室看護を、機械出し、外回りのどの役割を担っていても常に患者を中心に展開する看護と位置づけ、そのことが手術室看護の専門性の基盤であると述べており、本実習において学生が捉えた看護が手術室看護師が考える手術室看護と同様の傾向をもつと考えられた。このことから1日の見学を中心とした実習であっても、学生は特殊な治療環境下における「患者中心」の看護を十分捉えることが可能であると言えよう。

特に8割の学生が【不安軽減の看護】を捉えており、患者とのコミュニケーションがとりづらい手術の場においても、学生は患者の心理を捉えて看護を理解していた。抽出された「看護行為とその目的・意図」の内容をみると、「声をかける」など同様の行為であっても、入室時、

硬膜外チューブ挿入時、麻酔導入時といった手術を受ける患者の不安が増強されるであろう場面を学生らは的確に捉えていた。このような医療的処置が行われる場面において、処置のみにとらわれずに患者の気持ちに思いを馳せることが可能となったのは、患者の様子をじっくりと捉えることができる見学主体の実習の利点とも考えられた。また、昨年報告した<sup>3)</sup>ように、学生自身に患者の思いに共感し、理解する能力が養われていることの裏付けであろう。

【安全を確保する看護】、【合併症を予防する看護】といった手術によって患者が被る不利益をできるかぎり少なくする看護は、「看護行為とその目的・意図」の個数が多く、学生らは1日の実習で様々な具体的な看護行為を見学し適切に目的を捉えていた。実際に手術室では多種多様の合併症予防、事故防止の行為が主に間接助看護師によって行われるが、本実習において多くの場合、実習指導者が間接助看護師を兼ねており、指導者からの説明が十分になされたことが学びにつながったと考えられる。

【術後にケアを継続させる看護】は、申し送りや記録の場面を見学することにより学ぶことが可能となったと思われたが、術後に継続されたケアを具体的に捉えることは困難であった。記録用紙が手術室で行われていた看護に限定されていたため、学生の気づきを引き出せなかったもしくは学生が記載を控えたとも考えられた。術前・術中・術後と連続した人への看護を捉えるためには術中のケアが術後に継続される實際を学ぶ機会を設けること、

また実習記録用紙を術中看護に限定しないことを今後検討する必要があると思われる。

【プライバシーを配慮する看護】や【意志・意向を尊重する看護】は、全身麻酔下で意識がなく、無力な状態におかれる患者を擁護し尊重する看護として非常に重要であるが、これらを記述した学生は少数であり、1日の見学実習において学ぶことが難しい看護であった。学生は患者の心理を手術に関する「不安」として理解するにとどまり、患者の意志・意向を理解するに至らないと思われた。また、患者のプライバシーや意志・意向を尊重する看護は合併症や危険から患者を守る看護とは異なり、看護師個々の「配慮」として行われている場合が多く、看護として言語化されないため、学生の感性により気づきに差が生じると思われた。指導教員は臨床看護師の「配慮」を看護として言語化し、学生の気づきを引き出すことに加え、「配慮」をケアとして提供する場面を意図的に学生に示してもらえよう臨床看護師と連携をとる必要があると思われた。

少数ではあるが、【医師を介助する看護】のように、医師の介助や患者の身体的準備、器材の受け渡しなどの看護行為の目的を患者中心に捉えなかった学生もいた。手術室のように患者の目的が治療優位である場において、治療の主たる担い手である医師の介助を行うことは間接的に患者に還元される行為であると思われるが、その点を十分ふまえた看護行為の目的の理解ができるよう支援が必要であろう。

また、行為及び目的・意図が看護の視点から適切でないとして抽出の段階で削除された129記述の中に「手術をスムーズに行うため」といった曖昧な捉え方が多くみられた。手術をスムーズに行うという目的は手術に携わるスタッフが持つ基本的な姿勢と理解できるが、看護の視点からみた目的・意図としては不十分であり、目的・意図を十分に表現することの重要性を伝える必要があると思われた。

## 2. 受け持ち患者の設定方法の違いによる学生の学びの傾向

学生の記述を外科系継続群、外科系単発群、内科系単発群に分けて検討した結果、どの群においても、全記述から構成されたカテゴリー12のうち10以上が再構成された。また、記述数及び学生数にも同様の傾向がみられ、

受け持ち患者の設定方法の違い、つまりは患者との関わりの程度による学生の学びの特徴はあきらかにならなかった。特に【不安軽減の看護】、【患者を把握する看護】、【合併症を予防する看護】、【安全を確保する看護】は各群とも過半数以上の学生が記述しており、術前・術後の患者とほとんど関わることができない内科系病棟の学生であっても1日の実習で十分学ぶことが可能であったと考えられた。酒井ら<sup>4)</sup>は講義進行中に学生が手術室を見学し患者・看護者体験を行う「手術室見学」と周手術期実習時に受け持ち患者と共に手術室に入室する「手術室入室実習」における学生の学びを比較した結果、項目としては共通しているが、学びの内容には質的な変化がみられ、「手術室見学」では手術患者に「共通する看護」、「手術室入室実習」では個々の患者の「状況に応じた特殊な看護」を学習すると報告している。つまり、酒井らの「手術室見学」が個々の患者と切り離された形で行われていることを考えると、本実習における患者との関わりが希薄な内科系単発群と同様の条件と思われるが、本研究において受け持ちを継続した学生と質的な違いはあきらかにならなかった。患者との関わりが深く、患者の個性への理解が深いと思われる外科系継続群の学生であっても「意志・意向を尊重する看護」や「プライバシーを配慮する看護」の記述は極少数であったことから、手術を受ける人に着目した看護を学ぶという実習の意図が学生に十分理解されていないとも考えられた。今後の課題として、手術室看護学実習の目的や意図を学生に十分伝える場を設けることや手術を受ける人の背景を捉えた上で看護の理解を深める記録用紙を検討することが必要であると思われた。

## 3. 研究の限界

本研究は記述する枠が設定された記録用紙を分析対象としていること、目的・意図が記述された看護行為のみを抽出していることによる限界がある。また、学生の学びに影響を与える事柄は受け持ち患者の設定方法以外にも実習施設や指導者の関わり方、受け持ち患者の疾患・術式など多くの事柄があるためさらに検討が必要である。

## まとめ

成熟期看護学領域別実習における手術室看護学実習を行った学生の記録を分析した結果、目的・意図からみた

学生が捉えた看護は、手術患者を不利益から守り、よりよい状態にする目的をもった「患者を中心とした看護」であった。また、3つの異なる方法で受け持ち患者を設定して実習を行った学生の学びにあきらかな違いはみられなかった。今後の手術室看護学実習指導の課題として、学生の気づきを引き出す関わり、手術室看護学実習の目的・意図の十分な伝達、記録用紙の検討を考察した。

なお、本報告は、日本看護学教育学会第13回学術集会で「手術室看護学実習で学生が捉えた看護」として報告したものに加筆修正したものである。

## 謝辞

手術を受けるという危機的な状況の中、学生が実習を行うことを了解してくださった患者の方々、学生を暖かく受け入れ、指導をしてくださいました臨地指導者の方々に心より感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 奥村美奈子, 兼松恵子, 北村直子ほか: 手術室実習を通しての学生の学び, 岐阜県立看護大学紀要, 3(1); 89-94, 2003.
- 2) 佐藤紀子, 若狭紅子, 土倉愛子ほか: 手術室看護の専門性とその獲得過程に関する研究, 東京女子医科大学看護学部紀要, 3; 19-26, 2000.
- 3) 前掲 1).
- 4) 酒井明子, 高柳智子, 丸橋佐和子: 周手術期看護における見学と実習のレポート内容分析による学習効果の検討, 福井医科大学研究雑誌, 1(2); 313-325, 2000.

(受稿日 平成16年2月23日)